

屋外熱環境に対する行動変容の評価を
踏まえた都市緑地利用者への介入の提案

代表研究者 村上 暁信（筑波大学システム情報系 教授）

〔研究報告要旨〕

本研究は、都市で人が利用できる空間において人にとっての熱環境（熱的快適性）がみどりによって改善されているか、という点に加えて、その改善は十分なものなのかを評価し、さらに人が実際にどのような空間を利用しているのかを明らかにした上で、緑地利用を促進するための介入方法を検討したものである。介入については、外部空間における可視化された温熱環境情報を取り上げ、利用者の空間利用に与える影響について評価することとした。

本研究は、東京都千代田区丸の内の Marunouchi Street Park および東京都千代田区大手町のホトリア広場で検証を行った。形成された熱環境の評価と人の移動滞留行動の関係把握を行うために、Marunouchi Street Park 内にてデータを入手・分析した結果、夏季の対象地の外部空間は非常に暑く感じる空間や、少しの移動で快適性が大きく異なる空間の存在が確認できた。また、対象地内で過ごす人々に基本属性をアンケートで聞いた後、行動を記録した。温熱環境に関する情報提供を行った人と、何の情報も与えなかった人で被験者を分けたところ、情報提供された人々の方が敷地内で行動変容が生じる人数の割合が多くなっていることが確認できた。さらにホトリア広場では、web アンケートを用い、移動滞留行動の動機も含めて温熱環境情報と空間利用の関係を検証した結果、什器ごとの温熱環境のバリエーションが多くなかったこと、仕事という特性上で他者との距離が場所選択に影響を与えていること、寒く感じる時間帯が多い等の要素で、温熱環境情報の有効性が変化することが確認できた。

以上のことから、夏季の外部空間においては可視化された温熱環境情報の提供により快適な空間利用の誘導が確認できたため、こういった情報提供の実用性が検証できた。